



南總
里見
八犬
傳

昭和四年十一月五日 印刷
昭和四年十一月八日 發行

有朋堂文庫
南總里見八犬傳三卷
(非賣品)

編輯者

塚 本 哲 三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼
發行者

三 浦 捷 一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有 朋 堂 印 刷 所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有 朋 堂 書 店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不 許 複 製

八大傳第八輯自序

曲亭主人。江戶隱士也。別號多有。名平居綴文處。爲著作堂。其次名小書齋。爲蠶齋。繙國史舊錄。奇文諸雜書。時號彫窩。閱儒書佛經。諸子百家之書。時號立同。自序於稗史小說。時號簞笠。耽戲墨。時號曲亭。編兒戲小策子。時稱馬琴。下俚巴人。其曲不高。和者彌衆。是以馬琴曲亭二號。著于世云。

曲亭山名。見漢書陳湯傳及大明一統志。馬琴取野相公索靖詞句以命之。相公詞曰。才非馬卿。彈琴未能。身異鳳凰。史吹簫猶拙。見管原爲長十訓抄。

是它有雷水。狂齋。半閑。信天翁。愚山人數號。約一十二號。

皆臨時隨意。莫弗署矣。或笑其別號之多。主人乃辨之曰。古人有表字。而無別號。或稱本貫。或以所居地名相呼耳。近世別號。始自儒流。間亦有堂閣樓臺精舍草菴。則名此而號某堂某樓主人。此後世有別號所

以至二三。不足怪矣。時好名者。相羨以爲雅事。因無其堂閣樓臺。亦自號某堂某樓主人。夫有名而無實。是爲虛名。虛名與身俱亡。不傳于後世。雖有十數號。與坊賈記本錢字號一般。非但文人墨客有別號。貴賤有家號。又有綽號。萬物有方言。多異名。至諸家本草。乃藥物異名最煩多。非學而得焉。識別殆不輒。故老氏曰。名可名。非常名。漆園亦曰。名實之賓。名實兩忘。始可知非常之名也。由此觀之。余之有十數號。猶無也。古之高人。許人聞名。不許人見面。余胡爲望高人。然惜身而不思名。比肩於稗官者流。而意織筆耕。不數造化小兒與之爲狡獪也。豈思名者所庶幾。能察是意者。可俱評稗史焉。未得是意者。何憑知作者之觀世寫情。有寓言以獎忠孝。戲謔中辨貞淫。猶且正是非。昭法戒。又善懲隱

愚禁竊盜之旨哉。雖然。集虛假之詞。而綴虛假之文。事之與文。素所無之。徵諸華胥乎。抑討於南柯乎。胸中有物。則求之于內。胷中無物。則求之于外。內外撮合。然後許多脚色出焉。於戲噫嘻。誰徐悟立談之旨於言外。世人多不思之。好閱稗史者。營喜虛假之詞之奇中出奇。且有千情萬形可笑可悲。可怒可罵之閤合已矣。不閱者。不擇巧拙。亦唯謂虛假之詞之誣世惑俗。一毫無益於名教。而擯斥之。至甚焉者。燒琴烹鶴。其故何也。爲膠柱不解。不悟幻境爲仙家。除此之外。厭常喜怪。是故徒好聽鬼而不樂觀鬼。昔者葉公好畫龍。而懼真龍。當時呈畫龍者賞矣。至三黜矣。余亦爲婦幼呈畫龍也久矣。尙幸不能致真龍焉。此拙編所以行于今。儻有與余同愚者。而思及于此。乃觀畫龍如觀真龍。其

油然有所感。而肅然知所懼。一日有客。余對客腐談如前條時八犬傳第八輯。全稿方成。欲序未果。卽次是言。代序以顏于簡端。

天保三年如月望

蓑笠漁隱撰

いはのやのかにまろおぢが、八犬傳をめでよろこびて、

よみたる八うた。

たをやめのはなのたもとにおひたてど　こゝろは雲をしののをすゝき
あたうちてたのみよりつるとしごろの　めぐみもかへす犬川のなみ
これやこのやしなひとりていぬかひの　ありておやには似ざりけむ蜂
もゆる火のなかにのがれて犬山の　わざすてつるもこころたかしや
きえぬべき露のしら玉　神も手にとりてもていぬえにはふかしな
おひかかる犬田のくろのすまひ草　したにくちたるるのくつちかな
おほろけのかりの色かはをみなへし　あたをもつくすはなのひととき
いぬむらのかきねのくす葉うらみをも　かへせる露のたまやうれしき

蟹麻呂者。伊勢松阪人。殿村常久一稱也。別號巖軒。善研究國學。而所發明。不尠矣。是以其著宇通保物語年立。千種根左志。各一卷有之。皆刻于家。然性謙讓。而不遊於名利間。是故其書雖刻成。而自非知音之友。未嘗與諸人。嗚呼。可惜焉。文政十三年。庚寅秋七月十六日病沒。享歲五十二。是歌易寶之前月所咏云。因附錄簡端楮餘。

養笠漁隱再識

南總里見八犬傳 目錄三

第八輯 卷之一

第七十四回……………一

牝牛悌順辭答恩錢
卸枋磯九墜殘雪窖

第七十五回……………二

趕醉客小文吾遇次團太
懷短刀假警女按摩犬田

第八輯 卷之二

第七十六回……………三

庚申堂俠者囚賊婦
廢毀院義任送船虫

第七十七回……………五

盡衆賊酒顛脅旅舍
傳內命由充招二客

第八輯 卷之三

第七十八回……………八〇

北母自恣賞罰
東使雙賜首級

第七十九回……………九

齋家廟良臣贈異刀
憩茶肆奸佞試落葉

第八輯 卷之四 上

第八十回……………一三

斬殘仇毛野與莊介戰
舒傳來小文吾和兩雄

第八輯 卷之四 下

第八十一回……………一五〇

荻野井返命偽刀還舊主
三犬士再會宿因重話表

第八十二回……………一五

青柳歇店胤智題詩歌
穗北驟雨禮儀喪行裏

第八輯 卷之五

第八十三回……………一八

得失易地勇士遇厄
片袖移禍賢女獨知

第八十四回……………二〇

夜泊孤舟暗資窮士
逆旅小集妙懲鄉豪

第八輯 卷之六

第八十五回……………二二

傾志夏行留四賢
占夢重戶說讖兆

第八十六回……………二五

道節再謀復讐
、大巧滅妖賊

第八輯 卷之七

第八十七回……………二八

談天機老獸惜舊洞
照蕉火勇僧入貓穴

第八十八回……………二九

湯島社頭才子賣藥
聖廟老樹從者走猴

第八輯 卷之八上

第八十九回……………三一

呈奇功義俠寧冤囚
詳祕策忠款鋤奸佞

第八輯 卷之八下

第九十回……………三六

司馬濱船虫鬻淫
閻羅殿牛鬼劈賊

第九十一回……………三七〇

鈴森毛野擊緣連
谷山道節射定正

第九輯 卷之一

第九十二回……………三九三

二犬分路資一犬
狐忠携鑣訟衆惡

第九十三回……………四二八

坐轎守如救主
隔川孝嗣演志

第九輯 卷之二

第九十四回……………四四〇

高嶽板橋道節放戰馬
五十子城信乃留姓名

第九十五回……………四五七

梟頭鎧忠與凱旋
鼓盆悼定正知過

第九輯 卷之三

第九十六回……………四八二

管領容讒疑良臣
鄉士仗義俟大敵

第九十七回……………五〇五

良將不征而地廣二總
兇賊無心而自訴積惡

第九輯 卷之四

第九十八回……………五八

盜人從者偷走被盜戮
宿賊巢強人免賊難

第九十九回……………五三

素藤聽鬼語施黃金水
遠親惑邪說鬧館山城

第九輯 卷之五

第一百回……………五七

舊黨應招土民益憂
返魂異術美人彌奇

第一百一回……………五九

老尼薦計舊祠新葺
逆將樹人公子喪衛

第九輯 卷之六

第一百二回……………六二

伏姬顯靈補破敗
義成分兵征逆賊

第一百三回……………六五

里見源老侯富山弔亡女
大江親兵衛高峰拉勅寇

南總里見八犬傳

東都 曲亭 主人 編次

第八輯 卷之一

第七十四回

牛を軒て、梯順答恩錢を辭ふ
杓を卸して、磯九殘雪窖に墜う

再説、犬田小文吾梯順は、那龍種なる暴牛の、突もて來ぬる勢ひ猛く、當るべうもあらざりしを、些も騒ぐ氣色なく、閃りと反して左右の手に、角を楚と捕駐たり。然ども怯ぬ怒牛の奮激、四蹄を壤に踏入まで、推倒さんと角へども、小文吾も亦一身の、力を極め挑あふて、一歩だにも退かず。千曳の石の地中より、見れ出て立たる如く、又烏獲が奔牛の尾を援留めしも、慙やと覺えて、和漢に儔多からぬ、稀有の壯觀でありければ、初に酷く蒐散されて、辟易したる牛力士們は、亦這絳の爲體を、看つと再胆を潰して、彼よく。と計りに、手を抗足を空にしつ、衆皆四下に聚ふものから、怕れて近くは找み得ず、呆れて齊一目成りてをり。然程に

小文吾は、權且牛を疲して、曳と被たるちから聲と、共に烈しき修煉の剽姚、左へ推させて、耶と右へ、揉回したる打播の本事に、然しも悍かる須本太牛は、鈍や頑童に放下さるゝ、猊兒の似く地响拍して、挫と仰反倒れけり。これを觀るもの思はずも、感じて喝と采る聲、猊に答て夥しく、霎時は鳴も已ざりける。登時力士幾名か、走り蒐りつ力を勦して、牛の四足を捉るもあり、又罽丸を擲むもありて、毛をもて糾る牛縻に、鶏の羽多くものせよ。と罵りつ辛くして、鼻に融しつ、太やかなる、絆索を楚と繋著て、哨子鳴らして牽起せば、牛はそが儘鎮りて、身振ひしつゝ立時に、小文吾を見て怕れけん、兩三步逡巡して、牽るゝ隨に阿容々々と、蕃山のかたに退きけり。有恚し程に小文吾の、案内に立たる磯九郎は、迺も果さで又立聚ふ、衆人と共侶に、間遙に小文吾が、勇敢膂力を目撃したる、こゝろ宛醉るが如く、初は跼み後は又、咱さへ面を起すと思へば、事鎮ると慌しく、はや稠人を搔分て、走り近づき小文吾に、聲をかけ腰を折めて、その歡びを演るにぞ、那大力士牛裁判們は、二頭の牛の主と聞えし、須本太角連二を先に立して、含笑ながら出て來つ、皆小文吾にうに對ひ、跪坐て齊一額をつきて、俺們はけふの結番の、此彼二頭の牛の主、虫龜村なる須本太郎、逃入村なる角連二、竝に大力士某甲某乙、牛裁判們で候也。當所の牛の角突は、年毎に間斷なければ、牛の放るゝこともあり、又

暴牛もなきにあらねど、牛力士們が修煉して、懸て捕軒候ひしに、須本太が牛の龍種なればや
暴出せしより手に乗らで、不慮の恩劇に及びしに、鬼神を欺くおん身の勇力、輒く牛を推滾し
て、那厄難を鎮め給ひし、御恩は三國山より高く、又衆人の歡びは、千隈川より深かるべし。小
坪で鰐を手捕にしたる、朝夷三郎義秀も、牡鹿の角を裂にきといふ、泉小二郎親衡も、皆是見
ぬ世の人なれば、虚實いかにかあるべからん。駭憶ふはおん身の力量、眼前に觀て初て知りぬ。
今も亦恁る勇士の、在たるこそ不思議なれ。願ふは本貫尊號旅館を巨細に名告せ給へかし。記
録に留めて後々迄の、話柄に倣まく欲す。いかでく。と慇懃なる、言語齊一乞問れたる。犬
田が答を俟ずして、找み出たる磯九郎は、さもこそあらめ、と誇貞に、はや須本太們にうち對
ひて、噫大爺達まだ識らずや。這個刀禰は東國より、武者修行の爲來ましたる、姓は犬田世稱
を、小文吾となん喚れ給ふ、海内無雙の猛者なれば、旅亭も一倍擇れけん、小千谷の郷に名も
しるき、石龜屋次團太が、一大得意の客人也。なれどもさせる款待なし。けふこそ這里の闘牛
を、觀せまゐらせんと豫より、約束せられし哥々の名代、おん郷導に立たれども、恩劇で興も
忽地に、鮫守の磯九郎を、認めぬことはなからんを、咱們を閣て當面に、事問稟すは無禮なら
ずや。と訛音高く窘れば、牛裁判は力士と俱に、驚きながら仰見て、現いはるれば磯九主、高

名耳に轟くものから、未だ面を識らざりければ、敬なき業を致したり。允し給へ。とうち陪話るを、小文吾は傍痛し、と思へばこれを慰めて、各々介意し給ふな。武士たるものは戦場にて、名ある勇士を撃てこそ、聊功に誇りもせめ、暴たる牛を制たりとて、何でふみづから負むに足んや。やよ、うち措し給ひね。と技に誇らぬ言の葉に、花をもたせて美しき、答に大家感じたる、そが中に須本太郎は、牛裁判們にうち對ひて、能ある鷹は爪を隠す、といふ鄙語も故あるかな。最大人しき目今の、おん辭に儘しては、御庇に立し甲斐もなし。幾千人の老弱男女が、幸ひにして怪我もせず、絆はや無異に治りたる、歡びもようすべく、おん報ひもせまくほしきに、今宵のお宿を仕らん。この義を取持給ひてよ。といふに頷く牛裁判們は、又磯九郎にうち對ひて、哥々、目今聞れし如し。誘虫龜へおん伴せん。宜く稟し給ひね。と憑めば有理、と磯九郎は、小文吾を見返りて、何方今宵は小千谷まで、還らせ給ふべくもあらねば、牛主達の所望に任して、那里に泊り給へかし。こは又自然の道理也。誘快々。と勧るを、推辭難たる小文吾は、才にその意に隨ひて、そは左も右もの事ながら、報ひを受べき俺にはあらず。聊たりとも用意せらるゝ、管待は初より、固く斷りまうす也。這義を違へ給ふな。といふに歡ぶ須本太郎、角連二さへ直實だちて、けふ御助力に遇ざりせば、怪我するものも多かるべく、且小可が